

『ソトコト』編集長インタビュー

水辺遊びから始める防災

いま、大人こそ楽しんでみる



川で遊び、地域の活性化に取り組み

『ソトコト』編集長 指出一正さん

1969年、群馬県生まれ。企業・国・地方自治体が推進する多数のプロジェクトに参加する。それらの活動や、「社会や環境がよくなって、そしておもしろい」をテーマとしたメディア『ソトコト』の制作を通じて、地域の活性化を進めている。国土交通省「流域治水の自分事化検討会」(略称)委員としての顔も。趣味はフライフィッシングで、好きな魚はイwanaとタナゴ。

毎年のように水害が発生し、気候変動は身近に感じるものとなりました。そして今後も、地球の気温上昇とともに、洪水の流量が増えると予想されています。そのため、一人一人が水害のリスクを認識し、それを自分のことと思う「自分事化」によって、命や財産を守ることや、大切な人を助けしていくことが重要になっています。

しかし…「水害」とか、「防災」と聞くだけで、心の扉がサッと閉じてしまう人も多いと思います。できれば、前向きに、無理なく水害のことを自分事化できないか？カワナビvol.14では、その答えを探しに、「流域治水の自分事化検討会」(略称)のメンバーである指出一正さんにインタビューをお願いしました。

——「流域治水の自分事化検討会」に続き、今回もありがとうございます。今日は、検討会でも提言されていた、「楽しく」水害のことを自分事化する方法をお話いただきたいです。その本題に入る前に、どうしてアウトドアの世界に入ろうと思ったのですか？

川も「買える」と思っていた

僕の出身は群馬県高崎市で、利根川水系の烏川が流れています。小学2年生の頃から魚釣りが大好きになって、放課後になるとその烏川でオイカワとかフナとかを釣って時間を過ごしていました。川の中には、ゴソとか宇宙人とかの世界と同じように、自分たちとは違う、ドキドキしたりワクワクしたりする空間なんじゃないかと、そんな風に思いを馳せていたのですが、魚を釣ると、なんとなくその空間が感じ取れるので、好きになっていったのが元々です。川にはクラスメイトもいるし、学年や学区が違う人もいて、友達関係が広がりました。学校でもない、家でもない、サードプレイスのような違う社会に出合えたのは河原だったという感じですね。これは大事な原体験ですね。

あと、小学4年生くらいの時、環境教育のテーマに公害があって、川で魚が死んでしまっているドキュメンタリーフィルムを見る機会が多くて、心を痛めたんです。自分が好きな世界が汚れていってしまうの

は、やっぱり悲しいなと思って。これが綺麗になる社会になっていくといいなと考えて、国土庁（※現国土交通省）の作文のコンクールがあったので、「川を買う」っていうタイトルで応募しました。川が汚れていくのであれば、自分が買って管理した方がいいんじゃないかと。林業にも関係していた父親が山を買ったと言っていたので、川も買えるんじゃないかと思っただけです。小学4年生の時に、ナショナルトラストっぽい考えがあったんですね（笑）。

そう思ったことが原点となって、釣りと山登りが好きになって、アウトドア雑誌の編集部で小学4年生から入って、そのまま環境というテーマに広がる形で仕事をしています。今、まちづくりや地域づくりの話を川に例える事が多いので、子供の時から川に接していたのは良かったなと思いますね。

——ドキドキワクワクの空間を釣りで感じる、その原体験が人生に大きく影響していますね！ 指出さんにとっては、川が身近だったことがよくわかるのですが、川——存在は人それぞれですね。

川に親しんだまちづくり

僕は今、神戸市の住吉川のすぐ近くに住んでいます。鮎がたくさんあがってくる、灘（※兵庫県神戸市東灘区）の皆さんがものすごく大事にしているところで、その市民

性も気に入って、川のほとりに暮らしています。家を選ぶとき、散歩するのにも1、2分まで水辺に出て行けるいい場所だと思いたね。川には生活排水が入らない設計になっていて、子供たちや若者たちが大勢いて活気がある、理想的な都市型の河川だなと思います。

ただ、少し怖い川でもあり、増水すると危険なんです。でも、市民はそれもちゃんとわかっている、愛される場所として川が日常にあるんです。要は、神戸のみんなが、川に背を向けない生活をしているところが気に入ったところですね。水辺で友人と語り合ったり、川遊びをしていたり、散歩やジョギングをしたり。当たり前のように、まちのカフェと同じように川に親しんでいて、水害のリスクも生活の一部として認識されているんです。

だから、「水害リスクの自分事化」への近道は、多分、川に親しむのが一番だと思うのですけれども、世代によって川との距離はまちまちだろうなって思うんですね。例えば、デパートに夢を描いていた世代と、ネットでモノを見てワクワクする世代は、お互いに見ている場所や空間が違いますよね。川と親しんでいた世代とデパートで高いものを見てワクワクしていた世代は結構近いかもしれないけれども、今の若い人たちが川を見てワクワクすることがあまりないのかも、正直思います。

でも、川に背を向けないで、川に向かってまちが作られているところは、まちに関わ

りたいと思う人たちがそこに現れた時、第一印象が半端なくいいんですね。花に水をやっているのが川沿いの風景としてあると、いいまちだなんていう印象になるわけです。これからもっと、エンターテインメント性で水辺に人を引き込むようなことが出来ると、いろんな人達が来ると思うし、水害のリスクを考える機会も増えますよね。



——人によっては距離が異なる川ですが、川の存在が意識できれば、水害のことも自分事と思えるかもしれませんね。

大人こそ水辺で遊び直す

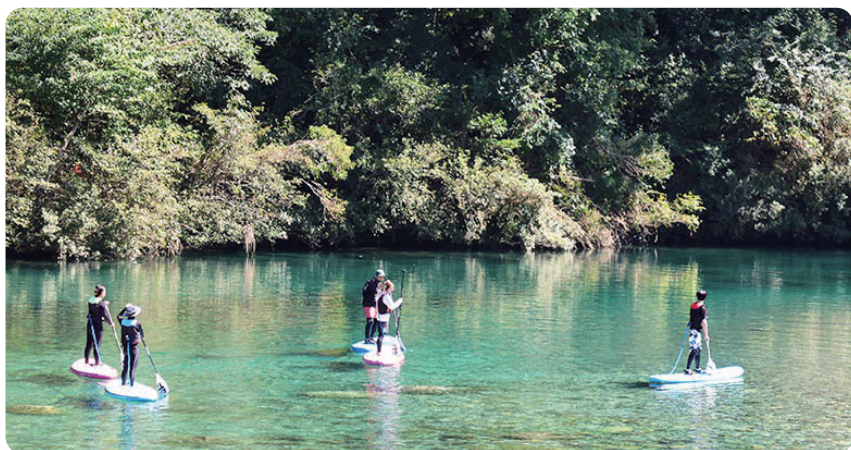
はい。ただ、大人がもっと水辺で遊ばないといけないだろうというのが僕の考えで、大人が遊んでいけば、その親を見て子供も覚えるのですが、川や水辺で遊ぶことが、1990年代や2000年代の若いファミリーからはごっそり抜け落ちてしまっているように感じます。日本の場合、野外教育は子供のためという前提が強くて、今まで野外で遊んだことのない親世代が、自分の子供を専門家に託すケースが多くて、もちろんそれも大事かもしれないけれど、大人の水辺での遊び直しも大事だと思います。

よく、釣りを教えてくださいって若い世代のファミリーに言われるんですけど、嫌ですっていうんです。わざと心を鬼にして(笑)。大人がしていることを子供と一緒にすれば良い体験になるし、知らない人に教わるよりは、親のような近い大人と子供が感動を共にした方がいいんじゃないのかなと。実際に水害が起きた時にも、それが何かしらの役立つかもしれませんからね。

川の石はヌルヌルしてるんだとか、実は凸凹で歩きづらいんだとか、川の流れて実はこんなに強いんだとか、そういったことを知ってもらうには、やはり平時の時に遊びとして川を見てもらうことが大事だと思いますね。濁流は簡単な流れじゃない

こともイメージできるし、平時にも、危ないところと楽しいところの両方があることを知っておくというと思うわけです。

家がない、水道がない、エアコンがない、気候の影響を全て受ける…そういうネガティブな状態で川で遊んでいることを、面白い!と思うているわけですから、実は、災害に一番近い遊びが、アウトドアやキャンプかもしれません。つまりは、そういう遊びの経験が災害の時に役に立っし、水害のリスクを自分のこととして捉えられるきっかけになるんだと思います。



Check



——普段はいい遊び場だから、川遊びで川のことを知っておくと、後々も良いわけですね。アウトドアではいろいろなギアやグッズがありますが、災害の時にも役に立ちそうなものはありますか？

胸元に笛を持っておく

いっぱいありますよ。例えば、僕は溪流に入る時に胸元に笛を付けています。強く吹かなくても遠くまで聞こえるやつです。何かあった時、誰かが助けに来てもらえるように付けていますが、地震の時も自分の位置を見つけてもらうことが大事ですよ。釣りをしても、家に帰れるかわからない、水が急に増えるかもしれない、道に迷うかもしれない、1人で夜を過ごすにいけないとか、そういった緊急

事態がいつでも想定されるわけです。だから、釣り人とかキャンプをする人は、身につで、歩ける状態でコンパクトなグッズを持っているんですけど、そういうものは有事の時にとでも役に立つと思います。

濡れてもいいものと、そうでないものをしっかり分ける装備も大事で、ウェーダーと呼ばれる、暑い日でも寒い日でも身体をちゃんと守ってくれる、ゴム長みたいなものも持っています。これは、急に増水した時は危ないと思いますが、足元を守ってくれる長靴がついているので、浸水しているところでも使えます。あと、ウェーディングシューズというものも使っています。これが実は、ヌルヌルした所を歩くと、災害後に、片付けをする際に結構役に立つだろうなと想像しますね。



——アウトドアが好きではなくても、持つておくといいものとか、それを目にするこ
とで、有事のことに想像が及ぶことがあり
そうですね。では最後、気候変動が進んで
いく社会の中で、私たちが、個人としてど
んなことをしておくといいと思いますか？
アドバイスをお願いします！

住んでいない場所へ行ってみよう

そうですね、なるべく住んでいる土地以

外に足を運ぶことが大事かもしれません。
僕たちは基本的に住みやすいまちに住んで
いることが自然という感覚を持っているけ
れども、いざ災害が起きて、避難所に詰め
たときには、ジェネレーションのギャップも
感じるし、ロケーションのギャップも感じる
と思うんですよ。その場所で自分を健康に
保つためには、ルーティンとは異なる、そう
いったギャップに慣れておくことが大事で
すね。

例えば、中山間地域に行くと、水を地下

楽しいことがある川に 目を向けて欲しい！

まとめ

から汲み上げていたり、意外なものが自給
自足だったり、普段の暮らしとは違うもの
に触れることができます。炭で何か作って
いるのを見ると、エネルギーに興味を持つ
こともあります。東日本と西日本でも文化
が全然違うこともあるし、「地域や社会は
変化することを知っておくのが大事です
よね。」

が当たり前」という認識を持つていけば、心
にゆとりが生まれ、有事の時もうまく立ち
回れるのではないのでしょうか。歯ブラシがな
いとか、小さな有事は移動した先で起こる
じゃないですか。そういったことを積み重ね
ておくと、うまく変化に適應できるように
思います。

金魚や熱帯魚も、水換えなどの刺激を与
えることで大きく美しくなると聞いたこと
がありますが、人間もそうなんじゃないか
と思いますよ。

指出さんの家の近くには、烏川の氾濫で殉職し
た救護隊の塔があり、駄菓子屋さんもあって、そこ
が小学生の待ち合わせ場所、溜まり場になってい
たそうです。すると、その塔に書いてあるものをな
んとなく見て、「あ、ここまで水が来るんだな」とい
う意識も持ったそうです。普段はスルーしてしま
うかもしれませんが、こういう「伝承碑」も川に目
が向くきっかけになります。

私たち河川管理者は、みんなが川に目を向けて、
楽しいことも通じて水害を自分事化し、変化に適
応していく意識が、まちを安全にしていける行動に
つながっていくことを願っています。今、日本では、
みんなが「GyAL」で取り組む治水対策を「流域治
水」として推進して
いますので、ぜひ、自
分事と捉えて欲しい
です。60秒の動画に
まとめたのでぜひご
覧ください！

動画はこちら！

